題名「3時のエール」

あらすじ

松下幸子（４５）は夫の松下誠二（４５）と二人暮らし。うつ病で退職した松下が突然、花屋で働きたいと言い出す。反対する幸子は、松下の主治医に相談する。医者の見解と、松下の日々の変化に心が揺らぐ幸子。一方、うつ病の兆候に気づけなかった自分が同じ過ちを繰り返す不安が拭えない。話し合いの末、松下の再就職を応援しようと決意する幸子。

花屋で働く松下。店内のハト時計が鳴る。まるで松下にエールを送るように。

人物表

松下幸子（４５）ハト時計メーカーの社員。

松下誠二（４５）幸子の夫。

西田正樹（６０）心療内科医。松下の主治医。

老夫婦

客

○松下家・リビング・中（朝）

ごく普通のリビング。松下幸子（４５）と松下誠二（４５）が向かい合って食事をしている。テーブルに卵焼き、白米、みそ汁が二人分並ぶ。

幸子「あれ、いつもより出汁が効いてる」

手元のみそ汁茶碗に目を落とす幸子。

松下「ご名答。ラジオで特集しててさ」

幸子「あー、寝起きでカラカラの体が潤う」

松下「あはは、カラカラか・・・そうだ。大きめの花瓶、はやく買わないとね」

棚の上に花束と写真。写真の中央、スーツ姿でハト時計を抱える幸子。

松下「花だよ。君が勤続２０年で貰った花束」

幸子「ああ。誠ちゃんがネットで良い感じの選んでよ。私より絶対センスあるし」

松下「僕が選んじゃって良いの？」

幸子「もち。私は花より団子なんで」

白米をほおばる幸子。笑顔になる。

松下「あのさ」

箸を置く松下。椅子にかけた鞄を漁る。

松下「・・・あの、これ」

ぎこちなくチラシを差し出す松下。

幸子「やだ、もしかしてリサーチ済み？」

松下「いや・・・その」

幸子の手元。『フラワー辻』のチラシ。

幸子「あ、誠ちゃんが仕事帰りに寄ってた店。花屋って花瓶も売ってるんだっけ？」

箸で卵焼きを取り上げる幸子。

×××

卵焼きが皿にボトリと落ちる。

幸子「ちょ、ちょっと待って。いきなり何？」

松下「うん。反対されると思って、なかなか言い出せなかったんだ・・・ごめん」

幸子「そりゃ反対するよ。だってこんな」

チラシに目を落とす幸子。

幸子「もっと良い再就職先あるって。人との交流が少ない事務職とか在宅ワークとか。そういうところ探そうよ。ね？」

首を横に振る松下。

幸子「花と関わる仕事もきっとあるから」
松下「人と関わる仕事がしたいんだ・・・人と交流しながら働きたい。前みたいに」
幸子「だって、あなたはそれが原因で・・・」
松下「先生には、ずっと前から相談してる」

3月のカレンダーが壁に掛かかる。2〜3か所に『通院』の手書き文字。

幸子「先生はなんて？」
松下「ここのパートを紹介してくれた。僕のような人に理解のある店長だからって」

棚の下段、うつ病に関する本が並ぶ。

幸子「じゃあこの話はどこまで進んでるの？」
松下「来週末、面接も兼ねて店に行くつもり。でもその前に君と話をしなくちゃって」
幸子「私に黙って面接行ってくればよかったじゃない。そしたら強行突破できたのに」
松下「・・・僕の人生は君の人生でもあるから。だからもし君がどうしても賛成できないなら・・・考え直すことにするよ」

幸子を見つめる松下。手元のチラシに

目を落とす幸子。困惑した様子。

○会社・倉庫・中（夕）

薄暗い部屋。ドア上部に『サンプル倉庫』の印字。ラックに大量のハト時計。スマホを耳にあてるスーツ姿の幸子。

西田の声「他にもいくつか候補を出す予定だったんですけどね。即決でしたから」

幸子「即決・・・ですか」

西田の声「人と花に囲まれた職場。彼にピッタリだ。確か、数年前は常連だったそうで」

幸子「患ってからは行かなくなりましたけど」

西田の声「僕も店長とは古い付き合いでね。以前、何人か受け入れていただきました」

幸子「ご友人だったんですか」

西田の声「・・・僕が娘さんの担当医をしていた時期がありまして。そういうことです」

○病院・院長室・中（夕）

広めの部屋。白衣姿の西田正樹（６０）

が受話器を耳に当てながら、氏名欄に
『松下誠二』と書かれたカルテを見る。

○橋（夕）

大きな橋。橋の脇で景色を眺める松下。

幸子の声「先生は、彼がもう誰かと一緒に働
ける状態だと・・・そうお考えなんですか」

西田の声「ええ。健康的な食事と生活習慣を
継続しているし、他者とのコミュニケーシ
ョンに対する強い恐怖心も無くなった」

背後を通りかかる老夫婦に会釈する
松下。笑顔で会釈を返す老夫婦。

幸子の声「我慢しているだけかもしれません」

西田の声「再び誰かと一緒に働きたいという
気持ちが芽生えた。これが何よりの証です」

橋の向こうへゆっくりと歩きだす松下。

○会社・倉庫・中（夕）

幸子がスマホを耳に当てている。

西田の声「この2年で少しずつ、でも確実に

旦那さんは変化しています。大丈夫ですよ」

○松下家・玄関・中（夜）

スーツ姿の幸子がヒールを脱いでいる。

松下が廊下の奥からやって来る。

松下「おかえり。今お米炊けるから」

幸子「ただいま。いつもありがと」

顔を上げて松下を見る幸子。松下の髪が短く切りそろえられている。

幸子「後ろも・・・自分でやったの？」

松下「え？」

幸子「（指をさしながら）その髪」

松下「あ、ううん。駅前の床屋さん」

幸子「仕事辞めてから行ってなかったじゃん」

うつむく松下。

幸子「・・・挨拶に行くから？」

松下「・・・ごめん。まだ決まってないのに」

幸子「まあ・・・良いよ。似合ってるから」

○同・寝室・中（深夜）

幸子と松下がベッドで横になっている。
西田の声「（幸子の脳内）この2年で少しずつ、
でも確実に、旦那さんは変化しています」
松下の寝顔を見つめる幸子。

○同・リビング・中（夜）
キッチンで手を洗うスーツ姿の幸子。
テーブルに料理を並べる松下。
幸子「最近、残業ばっかりで嫌んなるわ」
松下「新作のハト時計、大人気だもんね。ま
さに飛ぶ鳥を落とす勢いだ。ハトだけに」
幸子「落とされる側じゃダメじゃない？」
松下「確かに」
幸子「・・・そうだ。花瓶ありがとね」
花が挿さった花瓶が窓際に置いてある。
松下「ああ、うん。実はこれネットじゃなく
てフリーマーケットで買ったんだ」
幸子「え？ああいう賑やかな所、苦手でしょ」
水を止め、松下を見る幸子。
松下「うん。でもこの花瓶を見た時、きっと

君に似合うと思ったんだ。それで」

花瓶を見つめ、照れ臭そうに笑う松下。

松下「何度も行ったり来たりしたから、かなり変なヤツだと思われちゃったかも」

笑顔で話す松下。松下を見つめる幸子。

○同・寝室・中（夜）

オレンジの常夜灯がついた薄暗い部屋。

幸子と松下がベッドで横になっている。

幸子「この前、会社の倉庫で先生に電話した」

上半身を起こす松下。

幸子「先生の言う通り、あなたの心の変化を感じてる。身なりを気遣えるようになったり、人と交流できるようになったり」

松下に背を向ける幸子。

幸子「でも駄目。やっぱり賛成できない」

布団を頭までかぶる幸子。

幸子「・・・2年前、私はあなたの苦しみに気づいてあげられなかったの。毎朝トイレで吐いてることだって全然知らなかった。

ずっと一緒に住んでるのに」

幸子の肩が震えている。

幸子「怖いの。またあなたが心を病んでしまうかもしれない・・・私はそれに気づいてあげられない。あなたの力になれない」

松下「それは違う。違うよ幸ちゃん」

布団越しに、幸子の肩に手を置く松下。

松下「君は気づいてくれた。この髪も、花瓶も、みそ汁の味だって。僕の日常のとても小さな変化に気づいてくれた」

幸子の布団をゆっくりはがす松下。

松下「他の人にとっては何気ないことだけど、僕にはどれも、勇気のいる挑戦だった」

向かい合う幸子と松下。

松下「僕の小さな小さな心の変化に気づいてくれて、認めてくれて、ありがとう」

幸子の目から涙がこぼれる。

松下「僕も君も、あの頃のままじゃない」

幸子「私も・・・？」

うなずく松下。幸子の涙をぬぐう。

○松下家・リビング・中（朝）

幸子と松下が向かい合って食事をしている。テーブルに焼き魚、白米、みそ汁が二人分並ぶ。

幸子「誠ちゃんがここまで花が好きとは」

松下「ん？」

幸子「フラワー辻。即決だったんでしょ」

松下「・・・それだけが理由じゃないけどね」

幸子「え、そうなの？他の理由ってなによ」

しばしの沈黙。食事を続ける松下。

幸子「教えてよー。気になるじゃん」

松下「・・・見守られてる感じがするんだ」

幸子「・・・何に？」

松下「・・・君に？」

○フラワー辻・店内

松下が笑顔で客に花束を渡す。店の壁にハト時計がかけてある。時計が鳴りハトが飛び出す。３時を指している。

ハト時計を見上げる松下。